

学費で大学を諦める？

教育情報社の「ライセンスアカデミー」の調査によると、約7割の学校で「学費や入学後の費用」を大学進学断念の理由に挙げていることが分かりました。

就学の意欲がありながら経済的理由によって進学を諦めざるを得ない、というのは学生本人はもとよりその親にとっても大変残念なことに違いありません。

「貸与奨学金や教育ローンを借りてでも進学した方が良い」と考えている教員が56.6%いる一方、大学生の就職状況が厳しくなっている中「奨学金を返済できるか不安なため生徒に勧めにくい」と感じている教員も多いといえます。

今や、子供の貧困が大きな社会問題となっていますが、親の経済力によって、子どもたちの生活環境や教育環境が大きく損なわれている状況には目を覆うべきものがあります。

将来の日本を背負う子どもたちが安心して学ぶことのできる条件や環境を整えることは、焦眉の急であり、国においては、親の経済力を背景とする教育格差の改善に積極的に取り組んでいただきたいと思えます。

以上のように申し上げた上で、大学に進学するという意味について考えたいと思えます。

大学へは、誰が何のために行くのでしょうか。

何故こんな当たり前の話をするかというと、私の周りでも、取りあえず大学に行くという若者が少なくないと感じるからです。

「将来、何をしたいのか大学に通いながら考える」こういう若者は良い方で、「したいことがないから、取りあえず大学に進学する」「大学に入ったら仲間作りをして、大いに遊ぼう」と、楽しい大学生活を夢見ている者も相当数いると考えられます。

大学で学ぶことに積極的意味を見出していない者にとっては、学費を出して

くれるはずの親にその力がなければ、進学を諦めるという選択はさほど重いものでないのかも知れません。ただ、懸念されることは、主体的意志を持たずに結果として何かを選択している若者たちの将来についてです。彼らは、結局、社会という大海原にただ漂流していくことになりはしないかということです。

その懸念を払拭するためにも、教育に関わる者は、子どもたちに夢や目標を持たせ、その為に努力することの大切さを教える努力を惜しむべきではないと思います。

もう一つ懸念することがあります。それは、諦めが早くはないかということです。

もし、大学で学びたいという目標や目的が明確であるのなら、困難があってもそれを貫く努力をすべきです。勿論、そうはいても親に経済力がなければ仕方がないではないかという声が聞こえそうです。

しかし、大学に行くのに何故親がかりでなければならぬのでしょうか。親の力を借りなくても学ぶ機会や方法は幾つもあります。

実際、一口に大学といっても色々な大学があり、また、全日制ばかりでなく夜間大学や通信制大学もあります。

自分の中に、大学で学びたいという意志があるなら、自分の目標、自身の学力更には経済的負担能力などを総合的に考慮して、様々な選択肢の中から選ぶ最高の機会を選択することが大切です。

大学に行くなら昼間の大学でなければ、夜間大学では就職をはじめ社会に出るときに大きなハンデだと考える人もいるでしょう。

そのような方々に、次のような文章を紹介しましょう。

「幸運から遠いところにいる人は、一步一步、幸運に近づくしかない。多くの歳月を要する。が、それに焦れて、馬を求めれば、ともに歩いてくれた人を失う。鵬（おおとり）の背に乗れば、墜落死する。人は生まれたとき、公平さにない。身分の上下があり、貧富の差がある。しかし生き方によって、その不公平をしのぐことができる。そうはおもわぬか。（宮城谷昌光著「沙中の回廊」より）」

私事ですが、私は働きながら大学で学んだ、今では死語となり果てているかも知れませんが「勤労学生」でした。（塾頭 吉田 洋一）